

【研究ノート】

北海道の漁村にみる過疎進行の プロセスと生活問題

——時代に翻弄され続けた国後島引揚者の運命——

清 水 浩 一

はじめに

本稿の主題は、過疎の進行に苦しむ人々の生活問題の一端を記述し、要約することである。過疎問題は今や都市（の一部）・地方を問わず、わが国に普遍的にみられる現象であり、その表層と背景はそれぞれに多様である。したがって私自身の視座をもう少し明確にしておくことが必要であろう。

私が選択した地域は北海道奥尻島であり、その中でも限界集落の様相を呈している神威脇地区に焦点を当てている。この神威脇地区は戦後国後島（一部は樺太）などの引揚者が集団入植して大規模化した集落である。戦争によって故郷を追われ、一切の生活基盤たる財産を失った彼らに、次なる過酷な運命が待っていた。それは生活苦であり、過疎化の波であった。それに耐えながら神威脇地区に定住することを選択した人々に対し、現在は限界集落という形で幕が閉じられようとしている。戦後の暗い裏面史ともいべき過酷な運命を可能な限り明らかにし、記述するのがここでの目的である。

どちらかといえば専門外の私がこうしたテーマに興味を持ち出したのは、実は私自身が国後島の引揚者の子孫であり、幼少時代に神威脇地区で（子どもの目線で）直に体験し、問題意識を心の奥深くに抱き続けていたからである。た

またま大学から特別研究休暇を与えられたため、いつかは……という思いを実現させる機会を得たのである。

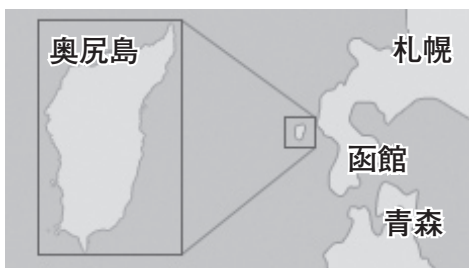
ただし専門外であるゆえ、先行研究へのレビューが圧倒的に不足している。加えて社会学的な研究手法に未熟であるため、論文としてまとめるには無理があった。やむなく乏しい資料と関係者へのヒヤリング、そして私自身の記憶と感性を総動員しつつ、研究ノートとしてまとめることとした。

本論では奥尻島神威協地区を、過疎の進行という普遍的な問題と国後島引揚者の過酷な運命という二つの事象が交差する、それ自体、極めて特殊な問題を扱っている。ただし北方領土4島の引揚者は漁民が多かったので、ここで観察される問題の多くは北海道の、とりわけ引揚者の多くが生活の再建を模索した東部（根室市およびその近辺）に共通していると考えられる。いずれにしても、私は過疎問題一般への普遍的で新たな知見を提起するのではなく、昭和の過酷な時代を生き抜いた引揚者たちの運命の一端を記述し、要約することに主眼があることを重ねて強調しておきたい。

1 奥尻島および神威協地区の概況

(1) 奥尻島の位置とアクセス

奥尻島は北海道の南西に位置し、日本海に浮かぶ孤島である。東西11km、南北27km、周囲84kmで、北海道では利尻島に次ぐ面積を有する。島は花崗岩の段丘で形成されるが、神威協地区が存在する島の西海岸は冬季の強い西



風や波の浸食を受け、切り立った崖が海の近くに迫る景勝地となっている。そ

奥尻島観光協会, <http://www.unimaru.com/>より

うした自然環境や津波災害などもあって、現在では島の西側で人が住むほぼ唯一の集落となっている。これにたいし島の東側は西海岸に比べれば幾分なだからで、海岸線に沿って漁村が散在し、島の人口の大部分が暮らす。島の多くは山林(71.4%)と原野(19.6%)で占められ、残り約10%の牧地や田畑・宅地などはこの東側に集中している。

夏季の8月における月平均最高気温は21.9℃、逆に2月の月平均最低気温は-3.1℃、年間平均気温



<http://www.big-hokkaido.com/island-net/okushiri-map-1.gif>より

は9.5℃である。また年間降水日数は81.0日、年間降水量は623.0mm、年間積雪日数は119.0日、最大積雪深は69.0cmである(いずれも函館海洋気象台の資料を紹介した『奥尻町勢要覧』(平成17年度作成)による)。

奥尻島への主なアクセスはフェリーである。北海道側の江差港からは2時間15分、瀬棚港からは1時間30分(冬季運休)である。これとは別に函館空港と奥尻空港を結ぶ小型飛行機の定期便があり、所要時間は約40分である。

平成5年7月の北海道南西沖地震と津波による甚大な被害を被ったことは記憶に新しい。ある意味、この悲惨な自然災害により奥尻島の地名や位置などが

全国に知られることとなった。現在では災害復旧の工事等は完全に終了している。復旧後、居住区と海の間には高いコンクリートの防潮堤が築かれている。昔、海岸すぐ近くの民家では茶の間の窓から海の時化具合が直に確認できていたが、今では海岸線に連なるコンクリートの壁が見えるだけの殺風景な風景が延々と続いている。

(2) 奥尻島の歴史、現在の主な産業構造

奥尻の名前の由来はアイヌ語の「イクシユン・シリ」が「イクシリ」と訛ったものであり、イクは「向こう」、シリは「島」の意味であるという。そして始めて「奥尻」の名が使用されたのは1700年代初頭に新井白石が著した『蝦夷史』からであるという（『奥尻町勢要覧』）。

奥尻島では古代遺物・遺跡が発掘されている。最も古い物では約7,000年前の縄文時代早期にあたる貝殻文尖底土器をはじめさまざまな土器・陶器、鉄器、装飾品が出土している。とりわけ装飾品では身分の高さを示す国内最大級のヒスイ製の勾玉、水晶玉・ガラス玉を身につけた人物の墓も青苗遺跡で発掘されている。

奥尻島の産業は漁業資源を生かした観光業が中心と思われるが、産業構造を産業に携わる人々の種別でみるとその実像はやや異なる。15歳以上の就業者数2,058人のうち、漁業は205人（10.0%）で農林業51人を含めた第一次産業は256人（12.4%）を占めるに過ぎない。建設業主体の第二次産業は439人（21.3%）なので残りの66.3%は第三次産業に属する。そのうちサービス業（25.3%）、公務（19.7%）、卸売・小売業・飲食店（12.7%）が大半を占めている（以上、平成12年国勢調査での数字）。ただし実際の日常の仕事は、漁業者であれば漁期でないときは自宅の裏山にある小規模な畑で自家消費を目的とした農作業に打ち込んでいたり、漁業と民宿を組み合わせる場合もあり、実際にはもっと複合的で多様である。

(3) 人口および高齢化率

平成21年3月31日現在の住民基本台帳における人口数は3,343人、世帯数は1,649である。このうち65歳以上は999人で、人口高齢化率は29.9%である。平成20年度のがわが国全体の高齢化率は22.0%で、すでに超高齢社会に突入しているが、奥尻島全体としては全国水準を上回るものの、離島ないし過疎地域としては意外に低い。たとえば『平成19年版高齢社会白書』をみると、都道府県別で最も高い島根県では27.1%（逆に最も低い沖縄県では16.1%）であった。ちなみに北海道は21.4%であり、財政再建団体となった夕張市は全国の市で最も高い39.7%、町村で最も高い地域は群馬県南牧村の53.4%であった。

さて今回の調査の対象となった集落である神威協地区は、前述したように島の西側で唯一の集落となっているが、集落人口28人（17世帯）のうち、65歳以上は実に20人で高齢化率は71.4%となる。65歳以上人口が50%を超える場合、その地域を限界集落と呼ぶが、神威協地区はその基準をとくに超えているのである。

(4) 現在の町政

奥尻島は島全体が奥尻町という一つの行政区域となっており、町制は昭和41年1月1日からとなっている。奥尻町役場は島の東側沿岸の中央部に位置し、総勢196人の職員が公務にあたっている（平成14年2月4日現在）。

平成19年度における普通会計決算（以下、数字はこの年度）では歳入・歳出とも38億円の規模である。しかし離島による財政効率を目指す広域化が望めず、過疎と高齢化が進行し、島内の産業も乏しい中で厳しい財政運営を強いられている。財政力指数は0.16であり、これは全国市町村平均0.55、北海道市町村平均0.28を大きく下回っている。類似団体の平均値も0.36であり、類似団体内順位は61団体中38位ということである。こうした財政の厳しさは地方債現在

高にも現れており、人口1人あたりでは1,982,498円となる。これは全国市町村平均の45万円弱、北海道市町村平均65万円弱、類似団体平均127万円弱を大きく上回る。ただし北海道南西沖地震災害の復興事業による多額の公債発行という事情も背景にあることを忘れてはならない。そして財政健全化への「努力」は町職員の給与水準を表すラスパイレス指数が85.5という数字に典型的に表れていよう。ちなみに、全国町村平均で93.2、類似団体平均でも90.1である。

2 神威協地区集落の形成（国後島からの入植）

（1）国後島引揚者の神威協地区への入植

自然条件の厳しい奥尻島西海岸の神威協地区には、昭和21年までは3軒の定住者が居住していた。そして人口の多い東海岸からは隔絶された小規模集落であった。「隔絶」と表現した理由は、この神威協地区には他の集落に通じる道路がなく、主な交通および物資の運搬手段は漁船であったことによる。隣村に位置する青苗地区までは獣道程度の道（16km）はあるが、冬の通行は困難を極めた。秋から春にかけて、風雪が強く、波が荒い季節はほぼ完全に近い孤立状態にあった。

この小さな集落に昭和21年の8月20日、国後島の1郡2村を中心とした45世帯、280人が入植した⁽¹⁾。もちろん入植直前に引揚者の先遣隊が視察に來たり、伐採等による居住地域の確保などが行われていたことから、突然、280人が難民のごとく現れたわけではない。

国後島を含む北方4島の終戦時の人口が約17,000人余であり、その全員が引揚者となったので、奥尻島神威協地区への入植者はそのごく一部分を占めるに過ぎない。

ここで本論の主題からは少しそれるが、ソ連軍の突然の上陸・占領、島民の決死の脱出、そして残留者に対する強制退去命令といった一連の歴史的な経緯

の一端を振り返っておく必要がある。引揚者のいくつかの証言からは概ね以下のような「事実」が語られている。

昭和20年8月28日、ソ連軍が択捉島に上陸後、短期間で4島は全て被占領状態となった。すでにわが国はアメリカに降伏し戦後処理に入っているという事情もあり、少数の日本軍部隊は降伏し武装解除を行った。またソ連軍による島民の漁船、家畜、家財道具などの没収・略奪もあったが、直接日本の民間人に発砲することは殆んどなかった。それでも虐殺等を恐れた島民の一部は、被占領直後から漁船などによる決死の脱出・逃亡を図った。その数は島民の半数くらいになっていたという。その後、冬季の結氷期を経て春を迎えた翌年4月頃からソ連軍は本格的に駐留し始めた。ソ連は本国から高い給与や住宅の保障などを約束してソ連の民間人を4島に入植させた。したがって島から脱出せずに残留していた日本人とソ連の民間人が隣人として一緒に暮らしていた時期があった。

しかし昭和22年の7月頃、残留日本人に対しソ連軍は退去命令を出した。この退去命令による強制引揚は数次にわたって行われ、昭和24年7月頃が最後であったという。強制退去は次のように行われた。ソ連軍が用意した1万トン級の貨物船が4島の集落を廻航して島民を乗せ、樺太の真岡港に運んだ。真岡の強制収容所で待機させた後、樺太の引揚者と一緒に日本船に乗せ、この日本船は函館港に向かった。その後、4島の引揚者は列車で根室方面に戻ったものが多かったが、結局、その全行程には約2ヶ月間を要した。証言では、この過程は引揚者にとって悲惨かつ過酷な経験であり、多くの高齢者や子どもが目の前で亡くなったという⁽²⁾。

こうして4島の島民引揚には、初期における決死の脱出組と、残留していたが退去命令により樺太経由で強制退去させられた残留組の二つの類型が存在する。奥尻島神威協地区への入植は昭和21年8月であるから、全員が「決死の脱出組」である。4島→根室近辺→奥尻島を辿ったことになるが、彼らが命から

がようやく辿りついた根室市も昭和20年7月にアメリカ軍による大規模な空襲により大きく被災し、もはや彼らが頼りにできる町ではなかった。そこで彼らの一部は当面の生活の場を別に求めることとなるが、道庁や漁連などの提案があり、それを受け入れる形で引揚者の一部が奥尻島の神威脇地区に入植したのである。

(2) 神威脇地区入植者による「証言」

こうした極限状況を実際に経験して奥尻島に入植した方に私自身がインタビューした要約を以下紹介しよう。A氏は、現在は北海道函館市で暮らしており、B氏は現在も神威脇集落で生活している。二人の証言には一部くい違いも見られるが、まさに当事者の「証言」として重視したい。

<引揚者Aさんの証言>

終戦後、数人が根室に渡り船を数隻確保し、国後島から夜中に逃亡。ソ連は退去命令は出さないが、強姦、強盗などの被害を避けるために女・子どもを先ず船で退去させる。ソ連は電線などを切断し、通信が不可に。昼に荷造り、夜に逃亡。

本人(Aさん)は当時小学3年で根室小学校に編入学(翌年、家族と一緒に奥尻に入植)していた。家族が国後島の植内地区にいたが、避難後、父が道庁に入植地等について相談。道庁は紋別、奥尻島神威脇集落など、いくつかの候補を提供。引揚者側は国と道の責任で入植地の住宅、電気、水道等の費用負担を求め、道は基本的にこれを了承。父は候補地を実地に検証し、入植地を奥尻島・神威脇地区に決定。その上で道が希望者を募り、結果的に国後1郡2村と樺太からの引揚者を加えた60数件の世帯が応募(実際には45世帯が奥尻に入植)。まず数人の先発隊が奥尻島の神威脇に入り、伐採等の環境整備(住宅建設の土地確保等)の作業に入る。なお、元々の住民として3軒が住んでいた。

入植当初は軍のテントを借用。その後(北海道本土にある)早川鉦山の閉山に伴う社宅を解体して廃材を船で神威脇に運ぶ。住宅の建設は引揚者が大工の心得がある人の作業を見よう見まねで自作。費用は公的な負担。磯舟も自作。

漁(イカ、ホッケ、アワビ)は可能だが売却は難しい。青苗まで運んで現金化。

<引揚者Bさんの証言>

国後島では植内地区漁業組合に所属して漁業を営んでいた。国後島引き揚げ後、北海道本土で漁業再開を目指していたが、北海道漁連が神威脇地区を紹介。視察を経て、日本軍のテントを張り1テントに3軒ずつ入居。漁業は国後島の場合とは漁法が違うため漁が困難であった。またアワビなどは禁漁で確保できなかった。樺太引揚者は国後島の引揚者であった親戚を頼って一緒に入植した。

もともとの居住者の家が3軒あった。引揚者の大半が生活の将来の不安のため見切りをつけて根室等に引き揚げてしまう。漁法も異なっていたのが影響している。

住宅は道庁の提案に沿って石崎鉦山の社宅を解体。その材料を運び、神威脇で伐採した木材と合わせて画一的な開拓住宅を皆で作った。

その後島内などから生活の糧を求め、神威脇に転入。いわば国後島引揚者と近隣地域からの転入者の両者が混在して神威脇集落を形成してきた。

一方、昭和22年1月2日には児童の就学を図るため奥尻国民学校分教場として設置を申請した。校舎は青年団および住民の奉仕により集落の中央海岸近くに20坪程度の仮校舎を建設。当時の在籍児童は初等科のみで49名であったという。この小学校がその後、過疎の波を受けて平成7年に廃校となる。このとき編纂された『神威脇小学校廃校誌 神威脇』の中には当時の小学生が国後島引揚者の高齢者に引揚時の状況などをインタビューしている。具体的でリアルティにあふれた表現があるので以下、抜粋する。

児童：引き揚げのことについて話して下さい。

木村（引揚者）：うーん、話せば長いことになるもな……。戦争に負けてなあ。それから、しばらくたつとソ連兵が進駐してきた。おっかながったなあ。殺されるがもしらねえが、山さ逃げたり、家の中に隠れて音しねえように暮らしたさ。それでも、外に出ないわけにも行かないから出たところ15、6人のソ連兵に取り巻かれたどぎだったらびっくりしたもんだ。それが、たばこくれていうことだったんで、あの時はびっくりしたなあ。

毎日毎日、仕事しないでさあ。北海道に逃げることばかり考えていたもんだ。

児童：島に残った人はいませんでしたか。

木村：船のない人、財産のある人、大事な仕事をもっている人など逃げれなかったようだ。その人たちはずっと後から樺太まわりで帰ってきた。わしも3ヶ月ぐらい逃げないでうろ

うろしていたが、夜に音をたてないように、家族を船に乗せ、家も漁具も犬も馬もみんな投げたなあ、沖まで手で船をこいで時化の海を6～7時間かけて根室まできたんだ。うれしかったなあ。

別な船の人たちで、船をひっくり返して死んだ人もたくさんいるようだったな。

児童：根室について安心したでしょう。

木村：うーん、根室さ着いて安心したなあ。体から力が抜けたみたいになっただも、根室もすっかり空襲で焼けてしまっただも、焼野原だ。それでも喰わねばならないから、それぞれつて（知人）を探して落ち着いたんだ。食べ物がなくってねえ困ったもんだ。

児童：神威脇に来るようになったのはどうしてですか？

木村：わしたちは、引き揚げてきた次の日から、働かなければ食っていけないしなあ。どこかに漁ができる所探してさ。うーん、そのとき、北水（漁連）の世話で奥尻さ行ったらどうか、と話しがあつてさ、視察に（神威脇に）来たんだ。そのとき奥尻の島は宝の島でなイカの干づけ（大漁）、サンマの手づかみ、ウニ・アワビがいっぱいとれていたんだも、根室さ帰ってみんなと相談会開いて来ることにしたんだ。来る人間がだんだんふえて50軒ぐらいになった。

児童：神威脇に来て苦しかったでしょう。

木村：うーん、苦しかったなあ。道路がなく困ったもんだ。冬に海が荒くて荒くて、沖に出られなくて泣いたもんだ。それでも占領された国後にいるより天国ださ。

児童：どんな生活をしましたか？

木村：はじめは幕舎、掘立小屋でなあ、男も女も子どももそれあ苦労したもんだ。それから、魚の獲り（漁法）が違うので一番困ったなあ。磯まわりでアワビなんかとったことねえもんだものな。一略—

児童：魚がとれても道路がなくでは運べなかったのでは？

木村：いやいや、イカ、ホッケ、アワビを加工してたまったら船で青苗（隣村）に運んだのさ。あまり金にならなかったんで、みんな苦しい生活だったさ。

児童：どんな楽しみがありましたか？

木村：そうだなあ。みんなで酒のんでいろいろな話をする事だな。

（資料：熊本重昭編『神威脇小学校廃校誌 神威脇』神威脇小学校廃校事業協賛会，平成8年6月30日，p.51～p.52。ほぼ原文のままの引用だが，文中の（ ）は引用者）

こうして自然環境が極度に厳しく、僅かな人が住むだけの奥尻島の西海岸の神威脇集落に、国後島の引揚者が集団入植し、西海岸では珍しく大きな集落が形成された。しかしこの集落の周りは海岸線が切り立った崖が多いことから、

北海道の漁村にみる過疎進行のプロセスと生活問題



神威脇集落



奥尻島西海岸の奇岩

すでに述べたように、隣の集落までの道路がなく、電気・ガス・水道といったライフラインもない、孤立した集落であった。集落内簡易水道は昭和35年、電気は昭和36年、自動車通行可能な道路開通は実に昭和49年まで待たなければならなかった。まさに世界から隔絶された小宇宙の様相を呈していたのである。こうして突然人口急増した神威脇地区は、奥尻島全体から見ればその形成過程といい、自然環境といい、きわめて特異な存在となったのである。

そして当然ながら入植者たちの国後島への望郷の念が消えるはずもない。この経緯を知った世界的彫刻家の流政之氏は、神威脇地区の岬の上に「北追岬」という石彫を作成した。北方領土の返還を切望しながら、引揚者の第一世代（親世代）というべき人々の多くはすでにこの世にない。引揚時に青年ないし子どもであった人が今、高齢期を迎えているのである。

ところで証言にもあったように、漁法の違いや生活の苦しさから未来に不安を感じ、数年も経ないうちにかかなりの引揚者が根室方面に戻ってしまうのである。ところがその人口と世帯の減少を補うかのように、この辺鄙な村に島の他の集落や北海道の本土から、おそらくは何らかの縁故などを頼りに、生活の糧を求めて転入してくる。こうして過疎化が進行し始める昭和40年前後までは、神威脇地区はほぼ50世帯・250人前後の規模を維持し続けたのである。

3 奥尻島および神威脇地区の過疎化

(1) 奥尻島の人口推移

奥尻島全体の人口に関する統計は1886年（明治19年）から記録されている⁽³⁾。この年は482人で男270人、女212人であった。戸数（世帯概念とは異なる）は171戸となっている。その後1918年（大正7年）には7,202人（男3,777人、女3,425人）、1,310戸まで増加し、人口数は現在（3,343人、世帯数1,649）の倍以上となっている。その後少し減少するが、1935年（昭和10年）の国勢調査では8,206人、1,377世帯と、

記録が存在する統計では戦前のピークとなっている（昭和6年～9年および昭和11年～22年まで記録が存在しない）。

一方、戦後の推移について表1により概観してみよう。1962年（昭和37年）の8,219人が戦後のピークをなしている。その後ほぼ一貫して減少傾向（過疎化）がみられ、現在の2009年3月31日では3,343人、1962年を100.0とした指数では40.7まで進行している。この表1でさらに注目すべきことの第一は、1966年から1970年にかけて急激に人口の流出が認められることであり、この時代に何が起きていたか検証する必要がある。第二に、人口流出すなわち過疎化は現在進行形で続いていることであり、現在の過疎対策の効果や限界についても検証する必要があることである。

（2）神威脇地区の過疎の進行

神威脇地区（集落）に限定した人口や世帯数の推移に関する時系列的な統計は手元にない。奥尻町役場でこの種の統計が存在するかどうかについて確認する必要がある。ただしこの集落に存在した小学校の児童数の推移については休校に入る直前（平成7年にやむなく閉校）の平成元年までの統計は存在する（表2）。小学児童数で過疎の進行状況の一端を把握するのは可能だが、これに

表1 戦後の奥尻島における人口の推移

年 度	総数（人）	指 標
1950（昭和25年）	7,589	92.3
1955（昭和30年）	7,555	91.9
1962（昭和37年）	8,219	100.0
1966（昭和41年）	7,916	96.3
1970（昭和45年）	6,425	78.2
1975（昭和50年）	5,746	69.9
1980（昭和55年）	5,611	68.3
1985（昭和60年）	5,203	63.3
1990（平成2年）	4,739	57.7
1995（平成7年）	4,422	53.8
2000（平成12年）	4,038	49.1
2005（平成17年）	3,643	44.3
2009（平成21年）	3,343	40.7

資料：『新・奥尻町史 下巻』奥尻町役場、平成15年2月28日発行、および『奥尻町勢要覧』より著者が作成。

なお、年度が必ずしも均等間隔でないのは記録の欠損による。

よって世帯数の減少の推測には限界がある。理由は戦後しばらくの間は兄弟姉妹の数が現代に比べて極めて多かったことによる。ただ小学校を卒業後、同じ校舎にある中学校のクラスに移り、中学を卒業後、ごく一部の例外を除けば殆んど全ての中卒者は神威脇集落から転出していった。したがって表2にみる各年度の児童数の分だけ確実に過疎化していったし、それに加えて児童の属する世帯もやがてその多くが転出していった。

表2をみると、児童数（小学1年から6年の合計数）は昭和30年代半ばから

表2 神威脇小学校の児童数の変遷

年度 (昭和)	認可数	編制数	教員数 (人)	児童数 (人)	年度 (昭和)	認可数	編制数	教員数 (人)	児童数 (人)
24	2	2	*3	65	46	2	2	2	18
25	2	2	*3	68	47	2	2	2	18
26	1	2	*2	37	48	2	3	*3	14
27	1	2	*2	29	49	2	3	*3	13
28	1	2	*2	31	50	2	3	*3	15
29	1	1	1	45	51	3	3	3	18
30	1	2	*2	50	52	2	3	*3	14
31	2	2	2	52	53	2	2	2	17
32	2	3	*3	67	54	2	2	2	15
33	2	3	*3	65	55	3	3	3	15
34	2	3	*3	58	56	3	3	3	14
35	2	2	2	52	57	3	3	3	9
36	2	2	2	44	58	3	3	3	12
37	2	2	2	37	59	3	3	3	11
38	2	2	2	32	60	3	3	3	10
39	2	2	2	27	61	3	3	3	7
40	2	2	2	35	62	2	2	2	6
41	2	2	2	31	63	2	2	2	6
42	2	2	2	31	H1	2	2	2	4
43	2	2	2	31					
44	2	2	2	21					
45	2	2	2	23					

資料：『神威脇小学校廃校誌 神威脇』

注1)：*は中学から配置されたと思われる。

2)：S24～28までは校長が中学の学担。

3)：S59年・中学校廃校。

4)：教員数には校長は含まれていない。

減少していく様が理解できよう。同じ校舎の中学校への進学を考えると、集落に児童数が目に見えて減少していったのは昭和40年代に入った頃からと推測できる。また昭和20年代の児童の多くは国後島引揚者の児童であったが、やがて引揚者以外の島内・島外の転入者の児童が相対的に増加していった。

現在の神威脇集落には児童は一人もいない。わずかに夏もしくは正月に集落民からみれば孫にあたる児童が一時的に帰郷するだけであろう。これに夏の観光シーズン、観光客の子どもが加わる程度である。この時期以外の集落はひっそりとしたものだが、昭和40年代に入る前は、集落は子どもの遊ぶ声で賑やかだったし、学校行事が集落の文化の中心であった。運動会や学芸会、学校を会場として月1回程度行われる映写会には村人全員が参加したし、村の祭りや盆踊りもそれなりに賑やかであった。だが少子化は学校の閉校をもたらした。集落民の一人は「あの時は最もショックで寂しかった」と語っていたのが強く印象に残っている。

過疎の多くは児童の劇的な減少を招き、結果として集落の高齢化に拍車をかける。

4 神威脇地区における過疎進行のプロセス

(1) 過疎のプロセスを探る意味

過疎および過疎問題はわが国の地方に一般的に見られる普遍的な現象である。転出先は一般に（近くの）都市部となり、過疎問題は都市の人口増加や過密問題と表裏をなす。そして過疎地域から都市地域への転出は、全体として農林水産業から商工業やサービス業への移動、すなわち産業構造の変化をもたらすが、こうした変化がさらに過疎化を促進する要因となる。それだけ産業間における所得水準の格差、都市と農村・漁村の生活利便上の格差が大きいといえよう。

こうした一般的な傾向に加えて、特殊な集落形成過程をもつ神威脇集落の過疎進行は、その分特殊事情を考慮する必要がある。それは神威脇地区の入植者たちは、その土地を出自とする（土着的な）人々とは異なるという厳然たる事実である。仮の緊急避難場所と考えていた人も多かったという。しかし一定の歳月を経てしまった場合はもはや国後島に近い根室市近辺には戻れず、混迷の中で日々を送ったであろうことが推察される。

入植当時は賑やかな集落であったし、少なくない入植者が生活の展望を望めず根室方面に戻っていったにしても、その分、入植者ではない（近隣地域）の転入者も新たに集落の構成員になっていった。それなりに賑わいをみせていたが、昭和40年前後からやはり過疎は進行した。そのプロセスを顧みることによって、昭和という時代に翻弄された当事者たちの生き様を追いかけてみたい。

（2） 過疎進行の経緯

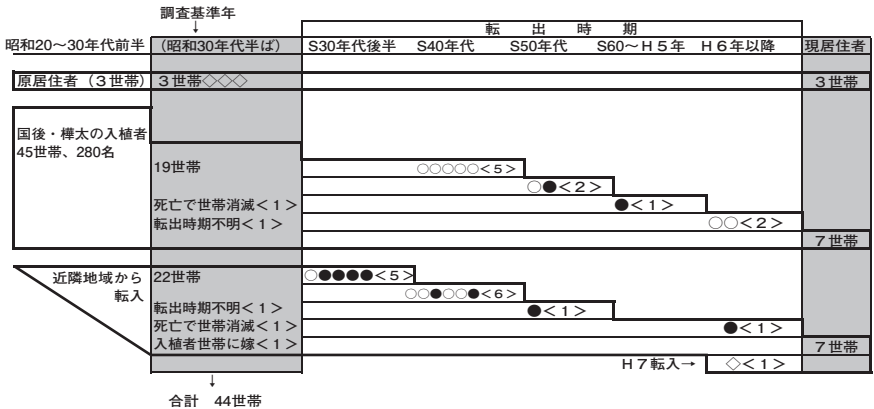
昭和30年代後半から40年代にかけて急激に過疎が進んだ事情は、小学校の児童数の減少にも現れていたし、奥尻島全体についても同様の傾向があった。その過程を神威脇地区に限定してもう少し詳しくみていこう。

図1は、私自身の神威脇地区でのヒヤリング調査の結果から作成した「過疎進行の経緯」を示したものである。いつ、誰が転入し、反面、いつ、誰が転出していったかを厳密に把握することは困難であった。村人の記憶は、かつて集落に住んでいた隣人の顔や名前、あるいは素性などはよく覚えているものの、転出入の年度となると殆んど記憶が曖昧である。これは致し方ないであろう。本来ならば役場で戸籍や住民票の異動について徹底して把握しようと思えば不可能ではない。しかし個人情報保護の壁と町役場への依頼は極めて困難であろうと推測した。

そこで私が採用した方法は、かつて私自身がこの集落の住民であり、小学高学年～中学生の頃の記憶がはっきりしているので、昭和30年代半ばを基準年と

して、この当時の全ての世帯を地図上に書き出し、ある世帯が国後の引揚者であるか否か、でないとするばいつ頃（大雑把な時期）どこから転入してきたのか、現在、すでに集落を去っている場合は、いつ頃、どこに、どんな風に転出していったかについて、数人の現在の住民にヒヤリングを行った。これを補完する意味で、すでに転出している知人に函館で面接し、転出の経緯についてヒヤリングを行った。主に世帯の動きに着目し、人口の推計は断念した。こうして得られた情報を図に示したものが図1である。

図1 転入・転出の時系列的概観



凡 例：○→子転出後親転出、●→一家総転出、◇→転出なし（現居住）

要点1：国後・樺太の入植者が昭和20年代～30年代に生活苦に耐えかねて急減したが、島内、島外他地域から生活の糧を求めて転入した世帯が調査基準年で22世帯を数える。漁村地域を流浪する貧困世帯を想像させる。

2：昭和30年代後半から40年代にかけて16世帯が転出し、過疎化が一気に進んで今日の様相が現れた。

3：国後・樺太の入植者は子転出後親を呼び寄せる場合（○）が多く、他地域からの転入者は一家総出の転出（●）が多い。

この図を解説しよう。戦後、国後島民などが集団入植した当時は元々の居住者は3世帯であり、そこに国後・樺太の引揚者45世帯280名が加わる。これが

戦後の神威協地区の出発点であり、本論でもそう位置づける。ところが間もなく入植者のかなりの部分が根室などへUターンしてしまった。そして調査基準年（昭和30年代半ば）では19世帯になってしまったのである。しかし近隣地域から生活の糧を求めて、新たな転入者が住み着き、全体として集落の規模はそれほど変わらなかったようである。調査基準年ではこうした世帯が22世帯を数え、引揚者19世帯を超えてしまったのである。そして調査基準年では合計44世帯を数える。これに教員の世帯3～4世帯を加えると出発点の規模とほぼ同じになっていくのである。

しかしながら昭和30年代後半から40年代にかけて転出者が急増するのである。昭和40年代末までに16世帯が転出し、この間、転入世帯は一時的に身を寄せていた場合などを除外すると一軒もなかった。かくして昭和40年代末には全部で28世帯に減少し、現在の様相を呈するに至る。その後の過疎の進行は緩慢であり、転出の他、死亡による世帯消滅や集落内婚姻などにより現在は17世帯（28人）となっている。

また図の中では転出形態を二つの類型に分けている。○印は「子転出後に親転出」の形態、すなわち子が中学卒業後函館市などに転出し、そこで世帯を構え、親を呼び寄せるというパターンである。もう一つの類型は●印で、「一家総転出」のパターンである。そして国後島からの入植者は○印が多く、近隣地域からの転入者は●印が多い傾向にある。こうした傾向はどのように説明できるであろうか？十分に検証できているわけではないが、私は次のような事情があったものと推測する。

すなわち転出するには転出先に親族や友人などの知人がいて、その知人による受け入れ条件の整備が多くの場合必要となろう。いわば何らかのネットワークの存在が必要なのである。国後島の引揚者のネットワークはもともと国後島に近い根室などの地域が中心であろう。そのため入植後間もなく将来に不安を抱えて定住をあきらめた入植者たちは、根室地域の知人を頼ってUターンした

ものと考えられる。しかし神威脇集落への定住を選択した人々は、20年近くの月日が経過すればそのネットワークも希薄になってしまったであろう。だが子どもが中学卒業後、函館市などの近隣都市部などに転出して世帯を構え、年老いた親を呼び寄せる場合が多い。これが「子転出後親転出」というパターンになると思われる。

反面、引揚者ではない近隣地域からの転入者は、もともと近隣の地域に知人のネットワークが存在し、転出は「一家総転出」という形態が可能であったものと推測する。

(3) 貧困と過疎問題、そして出稼ぎと公共事業（築港工事）

神威脇地区における集落民の生計の手段は漁業であった。当時、商店経営、旅館（民宿）経営、教師など漁業以外を生業にしていた家ごく少数であった。しかし漁業は不振を極めたようである。漁業資源の枯渇に始まり、他の漁港の大型船に対抗するために動力船や魚群探知機などの機械化をすすめたが、やはり設備投資の償還が可能なほどに利益は上がらなかったという。こうして集落民の生活は追い詰められていった。殆んど全ての子どもが中学卒業後、神威脇集落を去っていった。過疎進行の一側面である。

幸い、昭和30年頃に神威脇集落に第4種漁港（昭和28年着工、昭和39年完成）が建設されることになり、冬季を除く4月から10月まで築港工事が始まった。多くの集落民は漁期でないときは日雇い労働者として雇用された。これにより現金収入を増加させることができた。しかしこれだけでは不足であった。自然の厳しい冬季は工事もなく、また漁業も沿岸の海苔くらいしかない。やむなく男は出稼ぎとして島外に出て翌年の春までの間、家族と別れることとなる。前出の『神威脇小学校廃校誌 神威脇』には、子どもから出稼ぎする父親への手紙などが掲載され、当時の集落民の心情の一端が窺われる。

考えてみれば国後島からの引揚者のかなり多くの部分が神威脇集落の未来に

展望を持たず、早い時期に根室方面に戻った。しかしこんな厳しい集落に、島内・島外の近隣地区から少なくない人々が生活の糧を求めて転入して来たのであった。漁村地域で生き抜くことの大変さは、こうした集落民の移動状況にも現れている。集落間の移動の後に、やがて都市部への転出が顕著になっていった。

過疎は、単に生活の利便性を求めて村から都市部に移動したわけではない。生活の苦しさから脱出するために、都市部での賃金労働者になることを選択しなければならなかったと考えられる。そして昭和30年代から40年代後半にかけてわが国の高度経済成長は、こうした社会的移動を積極的に促したとも表現できるし、都市部に過疎地域の労働力を吸収できる容量を保持させることができたともいえよう。昭和50年代以降の不況に入る頃には、皮肉にも、過疎の波が一段落した後だったのである。

5 神威脇地区における高齢化と介護保険

(1) 過疎と超高齢集落

神威脇集落の平成20年度における65歳以上人数は20人、65歳未満人数は8人、したがって高齢化率は71.4%となる。奥尻島全体の高齢化率は29.9%（999人÷3,643人×100、平成17年国勢調査）なので、神威脇地区の高齢化は極端であり、限界集落の様相をとくに超えている。あまりに厳しすぎる自然環境の西海岸で孤立する集落は、今もその意味では奥尻島の中で特殊な地域になっている。

20人の高齢者を含む28人全員の世帯状況や子どもとの関係について実情を把握したのが表3である。この表をみると高齢単身世帯で暮らす高齢者は5人（5世帯）、高齢夫婦のみ世帯は12人（6世帯）、その他が11人（6世帯）である。

子どもとの関係をみると、子世代と同居している2世代世帯は2世帯のみである。子どもが奥尻島内に住んでいる世帯は9世帯、子の全てが島外に転出し

表3 現在の集落住民の世帯状況

世帯類型		子どもの状況			子どもなし	その他	合計(世帯)
		現在同居	島内在住	全て島外転出			
高齢者のみの世帯	高齢単身		ABBC	AB		B	5
	高齢夫婦		ABAA				6
その他の世帯	高齢単身+子	B		A			1
	高齢夫婦+子	A					1
	夫婦の一方が高齢						1
	非高齢夫婦		C		B	2	
	非高齢単身			C		1	
合計(世帯)		2	9	4	1	1	17

凡例：A→国後・樺太入植者，B→近隣地域からの転入者，C→元々の居住者
 注：高齢→65歳以上の方
 参考：65歳以上人数20人，65歳未満8人，高齢化率→ $20 \div 28 \times 100 = 71.4\%$

ているのが4世帯となっていた。ここから親が病弱になって介護など何らかの援助が必要になった場合，子が島外に転出した4世帯と子どものいない1世帯の計5世帯は，このままでは子世代の援助は得られない。隣近所の（他人の）援助を仰ぐか，福祉サービスを利用するか，子どもの住む都市部に転出するか，いずれかの方法を選択しなければならない。

子どもが島内在住であれば，車ならほぼ1時間以内に駆けつけることは可能だが，子どもの側の事情によっては常にそれを期待できるとは限らない。

(2) 介護保険の利用状況

神威脇地区の第1号被保険者数は20人である。奥尻町の平成20年度介護保険料の基準額は年額33,600円（月額2,800円）である。これを6段階に分けて徴収するが，神威脇地区に限定すれば第1段階1人，第2段階8人，第3段階3人，第4段階（基準額）6人，第5段階2人，第6段階0人となっている。

介護保険サービスは奥尻地区に保健福祉センター（ホームヘルプサービス他），青苗地区に特別養護老人ホーム等の老人福祉施設がある。その他奥尻地区に奥尻町国保病院（病床数60，医師2人）がある。ちなみに調査時点の平成

20年度では、特別養護老人ホームの待機者はないとのことであり、国保病院の入院ベッドとの兼ね合いもあるが、島民の表面化した介護ニーズには応えているとのことであった。

そして神威脇地区の20人の第1号被保険者は、調査時点では介護サービスの利用者はなく、そもそも要介護認定の申請もないとのことであった。さらに介護保険が実施された2000年4月以降、神威脇地区の介護サービス利用者は青苗地区にある特別養護老人ホームに1人が入所利用したのみであった（調査時点ではすでに死亡）。

そこで地理的に隔絶された神威脇地区でホームヘルプサービスの利用希望が1件出たらどうするかという私の間に、介護保険の担当責任者は車で片道20分以上の山越えが必要だが、ヘルパーのローテーションに余裕があるので必ず実施するとのことであった。ただ冬季の間は山越えは不可能なので宿泊設備があり特別養護老人ホームに隣接する「高齢者生活福祉センター」を利用するなど、別の対策が必要になると思われる。

こうして奥尻島全体を見渡した場合、介護保険における需要と供給のバランスは現時点で保たれている。しかし神威脇地区の高齢者は保険料を徴収されるものの、結果的にサービス利用には結びついていない。在宅サービスへのアクセスが極度に悪い辺境の地域という悪条件もあるが、かつて転出していった神威脇地区の「出身者」が現在は別の町で介護サービスを利用している事例もあった。

今後は神威脇地区の、20人を超える65歳以上の高齢者に対する家族介護が極めて厳しいとなれば、介護保険の介護サービスをどのように活用するかという難題に直面することとなる。

終わりに——神威脇地区は限界集落か——

限界集落という概念は65歳以上人口が50%を超え、かつ共同体の機能維持が

限界に達している地域を示す学術的な用語である。ただしこの用語には差別的な匂いがするとして国の公的な文書では「基礎的条件の厳しい集落」、「維持が困難な集落」と表現されたり、「水源の里」(京都府綾部市)、「いきいき集落」(宮崎県)などと言い換えられたりしている。

用語の適否は、ここでは問わず、限界集落というタームをそのまま使用する。

奥尻島は過疎地域自立促進特別措置法2条1項に指定する過疎地域であるが、神威協地区は限界集落である。過疎が住民の生活維持に支障を来たす、あるいは近い将来、集落単位で消滅することが予測されるような極端な過疎の進行が限界集落の抱える問題の一つである。

集落から隣人が次々と転出していく中で、最後まで神威協地区に残ることを選択した集落民に対し、今度は限界集落という難題が迫っているのである。では限界集落に付随する「共同体の機能維持」の問題とは何か。上下水道や道路などのインフラ維持は奥尻町役場の支援が期待できるにしても、限界集落に付随する問題としては、繰り返しになるものの次のような問題群を指摘することが可能である。すなわち、今では西海岸唯一の集落であるが、病院や福祉施設などの専門的なサービスを利用するにはあまりに遠すぎて高齢者にとってアクセス困難であること、子どもがいなくなったために正月と夏の観光シーズン以外はひっそりとした寂しさに包まれていること、漁業を営む世帯は17世帯中6世帯に過ぎず、他は年金生活者が大半で、生活の共通性が薄らいで集落民相互の関係性が希薄になったように観察されること、などであろう。各家にとってテレビが唯一の日常的な支えのようにさえ見える。私自身の昔の記憶を辿れば、夕ご飯後はいつも、ここかしこで大人たちが酒を飲みながら談笑していた。冠婚葬祭は集落を挙げての行事であった。しかし昔の面影は今はない。戸数が少なくなって逆に各人が孤立した印象を受ける。私のヒヤリング調査に協力してくれた集落民も同様の印象を語り、その原因として漁業という共通の話題ができる人が限られること、そして裏山にテレビ塔が立ってテレビ視聴が可能(昭

和40年代後半?)になり、それが唯一の娯楽になってしまったことが大きいという。

神威脇集落は近々消滅に向かうのであろうか?

思うに市場価値が高い高級な海産物(アワビ、ウニなど)が捕れ、そうした海洋資源が見込める間は生活の糧を求めて人々が入り出す可能性はある。その意味では林業が衰退した山間僻地の限界集落とは異なる。しかし「水源の里」のように、下流の都市部との河川を通じた運命共同体的な条件にはない。加えて定年退職者など、外部からの定住者の増加を狙うには冬季間の自然環境はあまりに厳しすぎるし、病院・福祉施設へのアクセスも課題である。現在漁業を営む世帯の後継者確保も見通しが暗い。

神威脇地区に限定して未来を展望するのは極めて困難だが、市場価値の高い海洋資源の存在、驚嘆に値する青く澄んだ海と海岸の景勝、夕日を見ながらの温泉などは観光資源としては十分すぎるほどの魅力はある。結局のところ、こうした観光資源を最大限に生かしつつ、高齢化する集落民の医療・福祉のさらなる整備・拡充をすすめることが肝要であろう。もしかしたらわれわれ日本人の生活価値観が変化し、田舎暮らしを通じて人間性を取り戻す、といった価値が普遍的に共有される時代が来るかも知れない。定年退職者を積極的に受け入れる方策を考えてみるのも手である。そのためには医療・福祉への安心感が重要な因子になることは間違いない。

国後島からの引揚者は、戦争の恐怖と命がけの脱出により生活基盤たる家・財産を一瞬のうちに失い、入植地である神威脇集落での生活苦と格闘し、過疎進行による学校閉鎖などの寂しさを噛み締め、そして今、限界集落に直面している。戦後日本の華々しい経済成長の影でその裏面史ともいべき時代の犠牲者でもあった。

注

- (1) 今回調査によると45世帯のうち、3軒は樺太出身者である。しかし便宜的な理由から本稿では一括して国後島からの引揚者という表現を使用する。
- (2) こうした経緯については当事者の経験者の証言を参考。北方領土問題対策協会のホームページにある「もと島民が語る『北方領土』」に20数人の証言が掲載されている。なおここでの証言によれば、ソ連の民間人が入植するようになると、残留日本人とは隣人として日常的な交流があった。主婦同士の洋裁・和裁を通じた交流や子ども同士で一緒に遊んだ記憶を語る。そして退去命令が出されると、互いに別れを惜しむ経験さえ語る証言もあった。戦争の本質を考えさせる証言である。
- (3) 奥尻島の人口・世帯等に関する統計資料は『新・奥尻町史 下巻』奥尻町役場、平成15年2月28日発行、p.493-p.494による。